



17期卒業生 和田 一步 さん Kazuho Wada

和田一步さんは、現在近畿大学農学部環境管理学科で環境保全について学び、魚の研究をしています。幼いころから生き物、特に魚が大好きだったという和田さん。のびのび遊び、のびのび学び、自分の「好きなもの」と向き合い続けた学園生活についてお話を伺いました。



▼シユタイナー学園に入ってから印象に残っていることはありますか？

入学当時はまだ三鷹にあったNPO法人の東京シユタイナーシューレ（※シユタイナー学園の前身）でしたが、とにかくずつと楽しかったな、という記憶です。シユタイナー学校は低学年の教室の壁はぬくもりのある色で塗られているのですが、本当にあたたかな場所です。あちこちで「物語」を通して学ぶので、授業自体もとても面白かったです。担任の先生がお話をしてくれる時間があつて、それを楽しみにしていました。カーテンを閉めてろうそくをつけて、かなり長い物語を素話で話してくれるんですが想像を巡らせながら、みんな静かに聴いていました。

▼特に面白かった授業はありますか？

音楽の授業のことはよく覚えていますが、低学年のころは音符も習わず、音の響きを聴いたり響きを届けたり、といった授業を受けました。鉄や銅で出来た小さな楽器を鳴らして、その音が響いている間に静かに歩いていてクラスメイトにその楽器を手渡すんです。自分が鳴らした響きを相手に届ける。雑に鳴らしたり、適当にやったら届いた感じがしないから、集中して音を響かせて届ける。人にものを伝えることの大事

▼12年生で行われる「卒業プロジェクト」ではずっと好きだった魚について研究発表を行ったと聞きました。

卒業プロジェクトはここで学んだ12年間を表現する場所、それを終えてこそ次のステージに向かえるもの、とずつと捉えていました。身につけてきたことや興味を持つていることを形にするだけでなく、12年間育んだ「人となり」を一番表現できる場所だとも思っていたので、ずっと好きだった魚しかなかった。テーマを決めました。卒業プロジェクトは一人ひとりメンターの先生がつき、面談を重ねながら準備していきます。どの先生がついてくれるかわからないのですが、僕は音楽の古賀先生という大好きな先生が担当してくれました。自分では考えていなかった部分を掘り起こしてもらい、そこから「人と自然とは切っても切り離せない」というテーマに繋がっていききました。卒業プロジェクトでは踊ったり、絵を描いたり「表現」をする人も多くなか、僕はデータや分析といった部分が多くを占める研究発表でした。先生とのやりとりのなかで、今まで感じ

さを感覚的に学んだような気がします。子どものときには気づいていなかったけど、シユタイナー学校の学びは、生きていく上で大事なことを身体や感覚を通して自然に感じることができ、そんな内容がとても多かったんだと思います。

▼藤野には何年生で移られたのですか？

3年生のときにシューレが学校法人となり、藤野に校舎も移りました。学園に通うため八王子に引っ越し、電車通学していました。家の近くに浅い川があつて、学校から帰ると川に行っていました。生き物が好きで、特に魚を捕まえるのが大好きだったんです。捕まえた魚は自分で料理して食べていましたね。学校の時間も学校外の時間もずっと楽しんでたのですが、4年生くらいから身体を動かしても動かしてもエネルギーが溢れて、かなりやんちゃなこともするようになりました。クラスの男子と女子の割合は半々くらいだったので、男子がみんなやんちゃになって、高い木の上まで登ったり、急な斜面のある壁を勢いつけてよじ登ったり、雪が降った日に雪合戦がエスカレートしてガラスを割ってしまった。

▼やんちゃはいつごろ落ち着いたのですか？

7〜8年生ごろにはだいぶ落ち着いてきた気がします。1年生から8年生まで担任の先生が代わらないので、先生はお父さんお母さんのような存在なんです。親ではないけど親くらい近くて大きな存在で、初等部の高学年5〜6年のころはクラスでそれこそ反抗したりもあつたのですが、8年生になると「先生と最後なんだな」というのが大きすぎて。夏休みが終わったころから「8年生劇」の練習が始まり、役者も美術も音



てきたことや考えできたことをまず引き出してもらって、結果、僕自身の人間性の裏付けがある研究発表になったのではないかなと思います。幼いころから川や山、自然と毎日関わりあつて、そこにいた生き物に興味を持ち、それが魚を好きになったきっかけです。人は快適な暮らしを求め続け自然環境は失われていっていますが、卒業プロジェクトの研究のため、小さな子どもたちと保護者のかたも一緒に川遊びをし、感じたことを聞き取りたりもしていくなかで、自然と触れ合う機会が増えれば人の環境への意識は変化するのではないかなとも考えるようになりました。

▼卒業後も魚の研究をされているんですね？

近畿大学農学部環境管理学科で、主に環境保全にまつわるような勉強をしています。今は数種類のドジョウの進化の現象についての研究を始めたところなんです。卒業後も魚に関わりたかと思つていますが、でも例えば環境コンサルタントの仕事に就いたとして、ある水辺の環境を調べ「貴重な生物がいるから建築はやめたほうがいい」と伝えてもそこに建物が建つてしまつたり…自分の思いを押

▼最後にシユタイナー教育で得たものはなんだと思いますか？

自分と向き合う力だと思つています。周りがどうこうじゃなく、自分に一番響くものが何かを解つていたら、ブレない自分でいられると思つています。自分のことが解つていけば、今もこの先も、必要なものと必要なことを選んで、生きていくことが出来ると思つていますが、それは常に自分と向き合つていないと解らなくなつてしまうのではないかなと思つています。そんな自分に向き合う力をシユタイナー教育で育んでもらつたと思つています。

楽も全部生徒で行う集大成だと捉えていたので、先生にありがとうございまして、という気持ちで取り組みました。『銀河鉄道の夜』という演目で、僕は大道具と家庭教師の役をやりました。2月の公演が終わったときの気持ちは今でも覚えています。「終わっちゃったな」という気持ちと、何かを越えたような、心地よい静かな気持ちがありました。

▼授業以外ではどのような高校生活を送っていたのですか？

9年生くらいからギターを弾き始めて、バンドを組んでいました。放課後、教室を二室貸してもらつて練習したり学園祭で演奏したり、音楽活動を楽しんでいましたね。シユタイナー学校は二人ひとりの個性に向き合つて、伸ばしてくれる学校なので、ある意味とても強い個を持った人たちがクラスに集まつていて、でも不思議とまとまつていました。ふつう趣味や好きな物事が近かつたり、自分と共通性がある人と親しくなりやすいと思うのですが、この学校に一緒に通つていなかつたら友達になつていたかな？と思つて自分とは違うタイプの人も信頼関係を築いていくことができました。当時のクラスメイトたちとは今年でも年に1〜2回は集まつている兄弟のような関係です。あとは、放課後は相変わらず、ひとりで川にも行っていました。

